



ミニ講座

「防災対応ゲーム『クロスロード』から学ぶ」

開催日：平成27年2月2日(月)

会 場：ホテルプリムローズ大阪 2階 鳳凰の間

講 師：京都大学防災研究所巨大災害研究センター

教授 矢守 克也 氏

【クロスロードの実践】

ファシリテーター：神戸クロスロード研究会 柿本 雅通 氏

八尾市人権文化ふれあい部市民ふれあい課 井上 祥子 氏

豊中市総務部人材育成センター職員研修所 西樂 尚也 氏





平成26年度事例研究（ミニ講座） 「防災対応ゲーム『クロスロード』から学ぶ」

矢守 克也 氏
(京都大学防災研究所巨大災害研究センター 教授)



1. はじめに

今から1時間お時間を頂き、今回の講座のメインになる教材「クロスロード」について話をしたいと思います。

その後、実際にプレイをしていただきます。このゲームを作るときから大変お世話になっている神戸市の柿本さんにファシリテーターを務めていただき、実際に体験していただきます。百聞は一見にしかず、実際にプレイをすると「いいな」「これはちょっと問題ではないか」と感じる場所も含めて、クロスロードについてよりよく分かると思います。

いただいた名簿で、以前お目にかかったことがある方が何人かいらっしゃっていることを知りました。また、私がかつてセミナーや講演で伺った市町村からもたくさんご出席いただいているので、クロスロードは既にご存知の方もいらっしゃると思います。しかし、初めてこの言葉を耳にされた方もいると思いますので、今日はその方々を念頭に置いて話をします。2回目、3回目の方にはどうかご辛抱いただければと思います。

2. クロスロードが作られた経緯

クロスロードという言葉の意味は「分かれ道」です。分かれ道から転じて、左に行くのがよいのか、右に行くのがよいのか、大変判断に迷う場面を指します。

今から20年前の1月17日、そしてそれ以降、阪神淡路地域の自治体職員や被災者、外部から駆け付けたボランティアなど、震災に関わった全ての方が当時直面した分かれ道、つまり、左に行くべきか、右に行くべきかと大いに悩まれた場面を教材化したものがクロスロードです。

クロスロードは、実際にはカードを持ってプレイする教材ですが、今日この場では自分ならどうするかを心や頭の中で考えて「イエス」または「ノー」のカードを挙げていただければと思います。

ごくごく簡単な記述で書かれた問題（設問）がプレイヤーの前に示されます。この設問をめぐって5人～7人の少人数のグループで話し合いをする、ワークショップ形式の防災・減災を学ぶためのツールです。これがクロスロードの基本的なしくみです。

クロスロードというゲームを、私は友人たちと約10年前に開発し、社会に紹介して、既に多くの方に使っていただいています。いつもポイントとして申し上げます。3点あります。

まずは、お手元に配布している冊子があります。昨年度、マッセOSAKAさんで、私も指導助言者として参画したクロスロード研究会が開講されました。そのときの報告書がこのブルーの冊子です。後ほどファシリテーターをされる柿本さん、そして柿本さんをサポートする2人も、この研究会の研究員です。

冊子には私が書いた所も幾つかありますが、70ページに、今話したクロスロードのポイントとなることが書いてあります。

1番目のポイントは、正解がない教材だということです。よく頂くご指摘に「早く正解を言え」とあります。しかし、正解がない難問（クロスロード）に直面せざるを得ないのが、阪神淡路の被災地の最大の知見だと思います。つまり、あらかじめ定めた正解がたくさん束になったものを普通はマニュアルと呼びますが、マニュアルに従って対応しようと思ってもできないのが、大きな災害との出会いの本質でしょう。それが阪神淡路地域の方々学びだと思います。これはその学びにのっとって作った教材なので、正解がないのです。この辺のニュアンスあるいは重要性についてはまた後ほど少し触れます。これが第1のポイントです。

2番目のポイントは、実話に基づいているということです。ブルーの冊子にも書いてあると思いますが、クロスロード神戸編の設問になっているのは全部本当にあった話です。今画面で示しているのは、阪神淡路大震災で神戸市の西市民病院の6階にいた看護師さんが実際に出会った難問です。ちなみに、クロスロードを最初に作ったときは「神戸編」の後に、他にたくさん作ってけるなどと思っていなかったもので、単にクロスロードと呼んでいました。その後「津

波避難編」「感染症対策編」などができてきたので、阪神淡路大震災の実話を基に作った最初のバージョンを「神戸編」と呼ぶことになりました。クロスロードの教材キットには、このような設問が20～30問でセットになっています。この一問一問が、遠い外国や昔に起こったことではなく、ごく最近同じ日本社会で起こった出来事をベースに作っているということ、これが2番目のポイントになります。

3番目のポイントは後からお話することにして、2番目までのポイントを踏まえて、この設問をもう一度眺めていただきたいと思います。実際に20年前に、先ほどの病院で起きたことです。この病院、5階の部分がクラッシュしていて、4階の上に6階が乗っている形になっているのが、右上の写真でお分かりいただけるかと思います。

右下の写真が、現在の同じ病院です。復興がなかったという形です。ご記憶の方も多いと思いますが、ここは当時マスメディア等でよく報道された場所の一つです。その意味でも、まさにこの設問と関係が深い場所です。この写真も誰かが撮っていたから残っていたのですが、このような形でレスキュー隊が救出活動をしています。私は、当時病院の6階におられた方にインタビューする機会がありました。そのインタビューを基にこの問題ができています。

前置きが長くなりました。ここで、皆さんの頭の中で意思決定をしていただきたいと思います。多くの方が市町村職員だと思います。ちなみに、私は豊中市民です。皆さんの中には豊中の市立・公立の病院に勤めている方はいないかもしれませんが、市町村職員として病院に勤務することもあると推察します。けっして起こってほしくはないですが、大阪の地に再び大きな災害があり、このようなことが起こったとしたら皆さんならどうするかということです。

あらためて設問を読みましょう。「あなたは公立病院の職員。入院患者を他の病院に移送しています。ストレッチャーの上に患者が横たわっていて、報道カメラマンが撮ろうとしています。ちょっと腹に据えかねます。この場合、そのまま撮影させますか、させませんか」という問いです。皆さんだったらいかがでしょうか。

実際のプレイでは、ここで「イエス」「ノー」のカードを出して、「私はこう思うからイエスだ」、「このような理由でノー」などだと意見交換していただきます。

正解なき難問ですが、こうした難問が発生すること自体を知らずに震災を迎えるよりは、知ってから迎えた方が少しはいいと思います。さらに言えば、こういったことも起こるだろうということだけでなく、職場やいろいろな関係者、例えば、今日はおられません、マスコミや医療関係の方も交えてこの問題をプレイしておけば、より良い対応を考えておくことができます。そういう意図でこのクロスロードを作っています。

皆さまそれぞれの考えを頭や心の中に思い浮かべたところで、先に行きましょう。これは後から柿本さんから説明があると思います。今のような問題に対して、「イエス」「ノー」のカードを出していきます。ふつう、7人などの少人数でプレイをします。「せーの」で出して、3対4とか5対2など、ある結果が得られたところで意見交換が始まります。

意見交換が終わったら、正解がないとって「なるほど、難題だな。それでは、さようなら」では、何の勉強にもなりませんので、この問題をどのように考えればいいのか、皆で考えます。今日のように私がお邪魔している場合は私が解説役を務めることもあります。また、全部実話ですから、このことで本当に悩んだ当事者の方がいます。だから、その人に聞いてみるのが一番いいわけです。難問に直面した当事者、あるいは同じような経験をした方に来ていただいて、解説していただくスタイルを取ることが多いです。

今検討している設問についてもそうすればいいのですが、今日はそういうわけにはいかないので、次善の策として、当事者がどのように考えたかをビデオの記録でご覧いただきたいと思います。まず動画をご覧ください。

○ビデオ上映

(A)「そうですね。今後すべきことというのは、報道の在り方ですよ。後から反省したのですが、亡くなられている方を搬送したり、いろいろなときに、上から写真撮影されたりして少しいラッとして、『そういうことをする間があったら、手伝ってください』と言いました。

実際に手伝っていただいた方もいますが、後から考えますと、私たち当事者は記録を残すことができません。そのときのことを口で伝えても、それは風化していきます。事実の記録は、やはり報道関係者の方だと思いました。それはそれぞれの立場があるからです。もちろん必要なときは人命が先だと思いま

すので、助けていただきたいと思います。しかし、そういう役割もあることをみんなで共有しなくてはけません。私たちだけで記録として残して、後世に伝えることは少し難しいと思いましたが、こういう人たちも必要だと思いました」

この方(A)はまさに経験された方です。大事なポイントを少し補足します。この方がいつ語っているかという、私の記憶では多分2004年のはずです。1995年が阪神淡路大震災が起きた年で、それから10年を迎えようという2005年の少し前です。今、大震災から20年を迎えて、いろいろな行事や取り組みがなされていますが、10年前もそうでした。10年しか経っていないのに、阪神淡路大震災のいろいろな思いや体験が薄れ始めているのではないかと、当時懸念されていました。

私の元上司は有名な河田先生で、皆さんの中にもテレビ等でご覧になった方もいると思います。防災の話になると必ず登場される先生の一人です。その先生を中心に、神戸市の職員で当時のことをよく覚えている方がまだ現役に働いている間に体系的にインタビュー調査をして、当時何があったのかをしっかりと残しておこうという大きな研究プロジェクトが行われました。そのとき神戸市側の窓口をしていたのが柿本さんで、インタビューを担当していた一人が私です。柿本さんとは、それ以来のお付き合いになります。

話を戻します。この方は、多分一生あの日のことは忘れないでしょう。ただし、9年前に自分の身に起きたことを思い出しながしゃべっている形になります。例えば、この方自身がクロスロードのプレーヤーになって、「イエス」「ノー」のカードを1枚ずつ渡して先ほどの問題を示したら、どちらのカードを出されるだろうかを考えてみます。このテープ起こしからも分かるように、この方の気持ちが揺れて、二通りのことを言っています。「イエス」のようでもあり、「ノー」のようでもあります。

当時は、かなり「ノー」の側に寄っていたようです。撮らせない、そんなことをしている暇があれば手伝えということで、「実際に手伝っていただいた方もあるのですが」とおっしゃっているからです。ここは修羅場なのだ、報道カメラを回している場合か、シャッターを押している場合か、手伝えと言って手伝っていただいたこともあると言っているのです、「撮影させない、ノーだ」と

いう気持ちをお持ちのようです。

他方で、それから9年経ったことも影響しているかもしれませんが、しきりに「今から思いますと」、「後から考えますと」というフレーズを口にされています。災害では常に、大変な所ほど情報が入ってこないし、大変な所ほど記録が残らないという法則が成り立ちます。この場合もそうです。この方は、少なくとも十分な記録が残っていないのではないかと印象をお持ちのようです。そういった観点から、今から考えると社会全体で災害に対応しているのだから、記録を残すという機能、ファンクションを担う方々がいてもおかしくなかったと言っています。そこだけ取り出すと、この方が今プレイしたときには、「イエス」のカード、つまり、撮影してもいいというカードを出される気もします。

3. ジレンマ：「こちらを立てれば、あちらが立たず」の意思決定

ここでもう一つだけ、クロスロードを理解するために必要な新しいキーワードを出します。それは、ジレンマという言葉です。これはこのゲームを作ろうと思ったきっかけを表現する言葉でもあります。

2004年頃、大震災の当事者に話を伺えば何うほど、皆さん割り切って災害対応をされているわけではなかったことがわかりました。割り切って対応されているわけではないというのは少し変な言い方だったでしょうか。つまり、粛々とマニュアルどおり対応しているわけではないという意味です。どうしたらよいか迷うような場面が続出なので、皆さんいろいろなジレンマを抱えて災害対応をしていたのです。「イエス」にしても、「ノー」にしても、一長一短あるのです。本音を言えば「あちらを立てればこちらが立たず」が、役場の職員としてはどちらかに決めなくてははいけません。そういう場面にたくさん立たされた、そういう言い方を皆さんなさいました。

今日は、病院での出来事をもとにした一つの設問だけを見てお話ししていますが、他にもジレンマはたくさんあったわけです。遺体の安置所での取材への対応、仮設トイレをどこに何個どこに置くのか、下水道の復旧工事をどこの地区から始めるかなど、ジレンマに満ちた、クロスロードのような局面がたくさんあったわけです。それで、「こういうときはこうしましょう」的な知恵袋のように覚えるタイプの教材より、当事者が実際に直面したジレンマをそのまま

追体験できるような教材の方が被災地のリアルな姿を学ぶにはいいのではないかと思います、それでこういう形の教材を作ったのです。

少し話を進めます。今、私は、ビデオの中のこの方にはジレンマがあったのではないかと申し上げました。「イエス」「ノー」とそう簡単に割り切れなくて、一長一短があるというフィーリングです。皆さまもそうだと思います。もしかしたら、今の設問は「どう考えてもイエスだ」と、100%ピュアに「イエス」だと思っている方もいるかもしれません。しかし、そういう方がゼロだと強弁するつもりはありませんが、多分多くの方は0対100ではなくて、30対70や65対35など、いろいろな思いを抱えながらどちらかを選んだのではないかと思います。

先ほどの女性は6階のナースステーションの副婦長さんでした。記録を残すために必要だったかという趣旨をご紹介しましたが、もちろんそれ以外に、その場で報道することによって救援や支援を呼び込めるのではないかと、被災地の窮状を全国、全世界に訴えられるのではないかとという理由で「イエス」にした方も多いのではないかと思います。逆に「ノー」の方は、例えば阪神淡路大震災当時は個人情報保護条例がなかったのですが、今はあります。それを根拠になさった方もいるでしょう。つまり、そのような時代の変化もあり、プライバシーを一番考えて、これは「ノー」ではないかという意見を持った方も多いと思います。このように一人ひとりの心の中に、まずジレンマがあるというのがクロスロードの大前提です。

でも、別のタイプのジレンマもあります。一人ひとりが、心の中で「イエス」か「ノー」かと葛藤しているだけではありません。今日はやりませんが、「今の設問で、今取りあえず『イエス』を選んだ方は手を挙げてください」「『ノー』を選んだ方、挙手をお願いします」とお願いすると、この部屋は現在100人ぐらいの方にお越しいただいていますが、恐らく100対0にはならないと思います。この問題は何回もプレイしているので、だいたい想像がつくのですが、少なくとも日本人に限れば、平均すると、3割ぐらいの方が「イエス」で、7割ぐらいの方が「ノー」になることが分かってきました。この部屋の結果も大体そうなるのではないかと思います。

災害は一人で切り抜けられるものではなくて、多くの方の協力で切り抜けていかななくてはなりません。先ほどの場面にしても、実に多くの方が関わって

ます。恐らく人によって考え方が違っているはずですが、つまり、ジレンマや葛藤は一人ひとりの心の中にあると同時に、人と人との間にも生じてきます。

例えば、役場の職員としてはプライバシーの観点からまずいいのではないかと考えているのに、患者の方は逆に撮らせてあげてもいいと言うかもしれません。むしろ逆の場合もあるかもしれません。マスコミの方々は、何としても撮らせてくださいと、あるいは、撮らせてくださいとすら言わずに撮ろうとするかもしれません。いろいろな立場の方々が関わって先ほどの設問の場面ができていきますから、人と人との間のジレンマ、葛藤も避けることはできません。

さて、ここで、この設問の当事者である患者、あるいは患者の家族に近い立場の方々の意見を少し紹介します。私はこういう仕事をしているので、フロアにいる方が全員看護師さんという場面で防災のことを話すこともありますが、これは、そういう場面で出会ったエピソードです。

この設問をプレイした後に一人の看護師さんが休憩時間に私の所に寄ってきて、「先生は、何でこの看護師さんが腹に据えかねているのか、お分かりになりますか」と問われたのです。

私がどうしてここに「腹に据えかねる」という言葉を入れたかという、先ほどのインタビューの中で、当事者の方が「ちょっとイラッとして」と言っていたので、取材記者に行き過ぎたような振る舞いがあった、むかつとする取材のされ方だったのだらうと思ったからです。

しかし、その看護師さんの意見は少し違っていました。「先生だって、写真に撮られてハッピーなときもあれば、嫌なときもあるでしょう。何かで表彰してもらったとか、卒業したなど誇らしいときであれば写真に撮られてうれしいかもしれないけれど、自分が落ち込んでいるときや困っているときに写真に撮られてうれしいですか」と言われたのです。この場面、そもそもなぜ患者を移送しているかという、この病院で治療が続けられないからです。ライフラインが全部止まってしまっている、けが人がどんどん運ばれてくるのに、そうしたけが人を診られないばかりか、それまでそこで治療をしていた入院患者の治療すら続けられなくなっているわけです。だから他の病院に出そうとしているのです。これは医療関係者や看護関係者にとっては自らの無力をさらけ出しているような場面で、少なくとも楽しいはずがありません。そこをバシャバシャ撮られてうれしいわけではないでしょうと、その方は言いました。

クロスロードをプレイしたその看護師さんは、この設問の内容をさらに踏み越えてくださった、あるいは、新しい観点を付け加えてくれたと言えるでしょう。つまり、患者のプライバシーや撮影する方の倫理といった側面以外に、医療関係者や看護関係者がこういう場面を写真に撮られたときの感情も、この設問を考える際に考慮すべき重要なポイントだという観点をプラスしてくださったのです。

クロスロードは大変曖昧な状況について議論するので、状況が曖昧過ぎて「イエス」か「ノー」かを決められるわけがないという批判的なコメントも頂いたこともありました。しかし、私たちは、この場面を考えるべきいろいろな側面や要素を、災害を経験した側から経験していない人に「これが大事だから学べ」と教示というスタイルで強制するのではなく、プレイを通じて、これから災害を考えていこうとしている皆さんの自由な発想を大事にする中で伝えたいという思いがありました。自画自賛しているようですが、先ほどの看護師さんの言葉は、自分で問題を作っておきながら、そんな視点を私自身今まで頭に描いたことがなかったので、勉強になったし、またとてもうれしく思いました。

クロスロードは、一人ひとりの心の中にジレンマがあると同時に、多くの方と災害対応や防災対策を考えるので、人と人との間にもジレンマが生じることを前提にしています。その意味で、この設問のもう一人の当事者であるカメラマン（報道関係者）は、こういう問題をどう思っているのかについても、ちょっと踏み込んで考えてみましょう。

聴衆が全員某新聞社の新人記者という場に立った経験が私にはあります。数年前でした。その新聞社の新人記者の研修会は全部で1週間ぐらいあったようですが、いろいろなカリキュラムの中で防災について学ぶ時間があり、そこを私が担当しました。2時間も3時間もお話だけでは退屈だと思ったので、この設問を少しアレンジして、こういう状況で記者のあなたは撮影するか、それとも遠慮するかと、立場だけを変えた設問を新人記者さんたちに考えてもらいました。そのときは、ちょうど100の方が受講していました。

「イエス」「ノー」の分布はどんな結果になったか。多分、皆さんは想像できるのではないかと思います。いかがでしょうか。私は驚いたことが二つありました。結論を言うと、1つ目にまず驚いたのは、「撮影する」が98人、「しない」が2人だったことです。逆に言うと、その研修会はよくできているのか

もしれません。昨日まで大学生だった若者達が、わずか1週間の研修でジャーナリズムのスピリッツに染まっているとも言えるからです。

でも、もっと驚いたのは、その後です。研修会ではありがちですが、後方に幹部の方が座っています。研修担当や人事担当の部長クラスの方々だったと記憶していますが、私の担当のコマが終わって休憩になったときに、「ノー」に手を挙げた2人が呼ばれて、お叱りを受けていました。最終的に記事にしないか、その写真を掲載するかしらないかはデスクやもっと偉い人が決めることで、第一線の記者がこの段階で撮影を遠慮していたらとてもやっていけないという趣旨のようでした。私は、クロスロードは正解なしのゲームツールとして紹介しているつもりですが、この設問は、新聞社の方、少なくともその幹部の方にとっては、正解のある課題だったんだと、それも一つの学びになりました。

蛇足ですが、私は仕事柄、マスメディアの方ともたくさんコラボレーションしています。だから、今の話で、「だからマスメディアはけしからん」などと言いたいわけではありません。メディアの方はメディアの立場から災害に一生懸命関わっています。それはそれで非常に大事なことです。ただし、今のエピソードに示されていたように、恐らく被災者や自治体の方とはだいぶ違う構えを持って被災地に臨まれています。そのことだけは私たちの側が知っておかないとまずいと感じました。

4. 新しい防災・減災学習ツールの必要性

クロスロードは阪神淡路大震災の実話を基に作っていったわけですが、その後の展開について、2問目を紹介することを通じて少しだけお話ししたいと思います。

阪神淡路大震災の後も、不幸にしてたくさんの災害が起きました。先ほど少しお話ししましたが、クロスロードの方式は、災害の場面あるいは防災を考えるためだけに役に立つものではありません。非常に使い古された表現で、使うのが恥ずかしいくらいですが、今の社会は価値観が多様化しているので、ありとあらゆることについて、「正解はこれだから、これに従ってください」というやり方が通用しにくくなっています。

もちろん、原発の賛否に始まって、自衛隊の海外での活動はどこまで許されるべきか。もう少し卑近なところでは、地域に開放するという意味で学校の校

門は開けておく方がいいのか、防犯上閉めた方がいいのか。硬軟、大小それぞれ織り交ぜて、いろいろな正解なき課題が社会にはあります（正確に言えば、ある人にとっては、正解ありきでも、別の人は正反対のことを正解だと思っているような課題、でしょうか）。いろいろな考え方を許容しつつ社会を運営していくしかない時代です。少なくとも私が生まれた50年前に比べると、そういう色合いが社会の中で濃くなっているのは事実だと思います。ですから、クロスロードの方式が、いろいろな場面で役に立つのです。まずいろいろな考え方があることを知る。また、可能であれば関係者が事前にゲームと一緒にプレイすることを通して、一つでも二つでも妥協点を見いだす、あるいは合意できるところは合意することです。

それから、この後体験していただく設問がまさにそうですが、非常につらいクロスロードがあります。左に行っても右に行ってもつらい、きつい言葉を使いますが、どちらにしても地獄のような結末が待ち受けている、そんなクロスロードもあり得ます。そのような厳しいクロスロードをもう少し優しいクロスロードにするために、事前にできることはないかを考えるためにも、クロスロードの手法が、防災や危機管理という枠を越えて重要になってきていると思います。

ちょっと脱線します。神戸クロスロード研究会、あるいはいろいろな地域でクロスロードをプレイした経験者の方々が、半年に1回程度、「クロスロードファシリテーターの集い」と呼ぶ会合を開催しています。その方々との共同作業で、阪神淡路大震災の実話をベースに置いた神戸編以外に、先ほどちらとご紹介した別の災害に関わるものや、学校安全、地域社会で環境問題（ゴミ等）など、いろいろな領域の難問を考えるためのクロスロードの別バージョンを作ってきました。これが2005年から2015年にかけての動きになります。

お手元の資料に「1000人のクロスロード」というチラシが交じっていたと思います。すでに終わってしまったイベントで恐縮ですが、それは昨年12月23日に行ったイベントです。神戸の会場に500人の方に集まっていただいて、全国の複数の会場をインターネット等で結ぶという工夫を神戸クロスロード研究会の方々が中心になって進めて、まさに同時に1,000人がクロスロードをするというイベントを行いました。

このような形で地域的な広がり、ハザードの種類を超えた広がり、自然災害だけではなく人為的な災害や事故、危機管理に関わることから、さらには、

その他の社会的な課題にもクロスロードの手法は広がってきています。

そして、その中でも、2011年3月11日の東日本大震災は、非常に大きな衝撃を私たちクロスロードに取り組んできた者にも与えました。ここからは、それに絡んで大きく二つのこととお話しようと思います。

一つは、クロスロードが東日本大震災の被災地で役に立ったのかという話題です。クロスロードは2011年より前に作成・公開されているので、大震災以前に、東北地方等でクロスロードをプレイした方も多数いました。ということは、クロスロードをプレイし、経験したことが、あの日、あるいはあの日以後、今日まで続く被災後の日々の何かの役に立てていただけたのかどうか、ということが問われます。ただ、今日はこの点について深入りする時間がないので、先ほどの青い冊子などを参照いただければと思います。

もう一つは、阪神淡路大震災とは違った災害の顔を東日本大震災はわれわれに突き付けたことです。津波防災です。それを受けた設問もクロスロードに取り込んで、今、南海トラフの巨大地震に伴う津波が大変心配されている折から、そうした地域で活用を始めています。私自身がもっともよく訪問しているのは高知県です。その他にも和歌山県、三重県などの地方で役立ててもらえるようなものに作り上げていくことも私たちの仕事だと思っています。

今、クロスロードの津波対策編を作成中ですが、今日は、その番外編ともいえる設問を1問、例題として皆さんに見ていただこうと思います。これが先ほど触れた、非常にづらいクロスロードにあたります。

クロスロードは先ほど見ていただいた設問や、この後第2部で経験していただくように、わずか100文字や120文字ぐらいの簡単な文章で課題が与えられます。しかし、1問や2問は映像を見て考えるスタイルがあってもいいのではないかとチャレンジのつもりで、この設問を作りました。

先だって高知県の宿毛という、県の西の端っこにある町の小学校、話をしている教室の窓の向こうはすぐ海という学校で、子どもたちに授業をしてきました。文章だけだと子どもになかなかアピールできないので、映像と一緒に見てもらいながらの授業です。

今から映像の一つ見ていただきます。有名な映像で、インターネット等にも上がっていたので、見たことがある方も多いと思います。釜石市の市役所前に押し寄せてくる津波が撮られた映像ですが、注目していただきたいのは津波そ

のものよりは、津波の前面で逃げている方々の様子です。

もちろん、津波がすでに襲ってきてしまった向こう側にたくさんの方々が残っていて、多くの方が亡くなったわけですが、この画面で撮られている範囲の中を見ても、カメラを持っている本人も含めてこの方は何とか助かるだろうと思える人もいれば、このままでは逃げ遅れてしまうのではないかと心配になる方々もいます。その中の一人に、おじいさんがいます。そのおじいさんを、「あなたなら助けに行きますか、行きませんか」というのがここでのクロスロードになります。

少し分かりにくいかもしれないので、2回映像をお見せします。2回目にそのおじいさんがはっきり映っているところで映像をとめます。1回目はまずは通して見ていただきたいと思います。ではご覧ください。

○ビデオ上映

こういう映像です。見ていてあまり気持ちのいい映像ではないので、その旨、最初に申し上げるべきでした。おわびします。東北地方で見ていただくこともあります。東北地方では必ず事前にお断りを入れています。

今の映像は、実は、今日プレイした1問目とも関係があります。だれかが撮っているからこそ、この映像が残っているわけですが、「ビデオを撮っている場合か」という意見もあれば、「今後の津波防災を考える上で貴重な映像だ」など、この映像そのものに対する意見もインターネット上で随分やり取りがありました。

ここでは映像を撮る、撮らないの話ではなくて、おじいさんに注目してください。

○ビデオ上映

今、画面の左端におじいさんが映っています。もう一人、マスクをしている女性が直前に走っています。女性もかなり逃げ遅れているようですが、走っているので間に合うかもしれないという感じです。

この場面に出くわしたとすれば、もう少し限定をすると、まさにカメラを撮っている場面、位置、場所にいたとすればどうするかというのが、今回の問いか

けになります。

ここに設定1と書いてありますが、小中学校で授業するときには設定5まであります。少しずつ設定を変えながら、あることを学んでもらおうという意図で設けています。特に設定4が大事だと思っています。

もちろん「イエス」の方も「ノー」の方もいると思いますし、ここでも正解はありません。もし一つだけ正解があるとすれば、こうなってからでは遅いということでしょうか。こうなってからでは、どちらにしても大変な決断になります。つらいクロスロードになるので、こうならないように事前にできる準備をしましょうということで、学校での防災教育では、このクロスロードをプレイした後、子どもたちにハザードマップを見てもらったり、子どもたちがよく行く場所から避難場所まで実際に時間を計って逃げてもらったりします。学校によっては、高齢者の体験をできるようなグッズ、つまり、目が見えにくくなったり、足が重くなったりする装具を付けて子どもたちが逃げる取り組みなどをしているところもあります。

さて、設定1に戻りましょう。地域にもよりますが、子どもたちは東日本大震災の津波はテレビ等で見ている、なかなか事がにはなっていません。そして助けたいという気持ちを持っていること自身素晴らしいことだと思いますが、この設定1では、「助けに行く子」が3割ぐらいいはいる感じがです。他方、7割ぐらいいの子は、津波の勢いを考えて、おじいさんはかわいそうだけど私では無理だと思って、「ノー」に手を挙げるのが普通です。

設定2の趣旨は、おじいさんが知り合いだったらということです。知り合いのおじいさんで、今朝もあいさつを交わしたばかりだったらどうかと問いかけてみると、「ノー」だった7割のうち、ほんの1人か2人、「イエス」に変わる感じがです。あまり大きく意見は変わりません。

設定3と4が大事です。設定3では、同じ状況だけど、これが自分のおじいさんだったらどうかと聞いてみるのです。すると、今まで助けに行かないにしていた7割の子のうちの半分ぐらいが「イエス」に変えるのが、大体標準的なパターンです。

そして次です。子どもたちに一番考えてほしいと思ったのは、この設定4です。そのために三つステップ(設定1～3問)を踏んでいるところがあります。設定4とは、「では、あなたのおじいさんの方はみんなに助けに来てほしいと

思っているだろうか」という問いかけです。

子どもたちに手を挙げて答えてもらおうと、「イエス」という子もいます。おじいさんだって目の前に孫がいるのだから、助けに来てほしいと思っているに決まっていると答えてくれる子もいます。他方で、はたと立ち止まって、おじいさんはもしかしたら「おまえら逃げろ。助けに来なくていい」と言う気がするという子もかなりいます。

設定3に戻ります。先ほど「自分のおじいさんだったら」というところで、「ノー」だった子が半分ぐらい「イエス」に変わると言いましたが、私は今まで2人だけ「イエス」から「ノー」に変えた子を見たことがあります。1問目と2問目は「助けに行く」と答えていたけれど、3問目に至って「助けに行かない」に変えた子です。たまたまでしょうが、いずれも小学校5年生の女の子です。「どうして？」と理由を聞くと、これも偶然なのか、理由は一緒でした。皆さんは分かるでしょうか。この子たちは、女の子だからでしょうか、体力もないし、もともと助けられないと思っていたのです。でも思わず助けに行ってしまうという意味で、設定1と2では「助けに行く」にしていました。だから、自分のおじいさんの場合、助けに行くと自分も死んでしまうし、おじいさんも死んでしまいます。そうすると「お父さんやお母さんはとても悲しむと思うので、自分だけでも生き残る可能性の高い方を選びます」。これが2人の女の子が語ってくれた理由です。

結論は二つあります。一つは先ほど言ったことです。このような厳しい場面を知ってもらい、そうならないための準備をちゃんと進めてもらうことです。あるいは、準備の勉強に対する動機付けです。市町村の方々を前にして言うのもなんですが、分かりやすい例をあげると、ハザードマップをいくら公表しても、インターネットにアップしても、「情報をお出ししていますよ」という域をなかなか出ないと思います。実際にハザードマップを見たことがあるかというアンケートをすると、見たことがあると答える人はたいてい数パーセントです。この種のことは見たことがあると答える方が望ましいにきまっていますから、見てもないのに「見たことがある」と答えている人も多いと思います。例えば、選挙に行く気もないのに、事前には「行く気がある」と答える人の方が多いのと同じです。だからあの数パーセントはもっと割り引いて考えなくてはいけなくて、ほとんどゼロに近いのではないかと思います。

では、せっかく公表されたハザードマップをなぜみなさんご覧にならないのか。何の役に立つかが実感できないからでしょう。自分の家にはどのぐらいの津波が来るのか、何分ぐらいで来るのか、〇〇川があふれたときには2階まで逃げていれば十分なのか、地面を一回歩いてでも高台や市町村の指定した避難所に行かなくてはいけないのか。こういったことを迷う場面に一度でも立たされれば、ハザードマップをぜひとも見てみたいと思うはずです。そこには、こうした正解なき判断を、それでもよりベターな形でなすために必要な、重要な情報が記載されているからです。

今日ご紹介しているクロスロードも、クロスロード単体で使ってもどうなるものではありません。正解なき難問に直面し問題意識を持ってもらった後に、自分たちの学校や遊びに行っている範囲はどのぐらいで津波が来るのか、何分ぐらいの場所なら助け合う時間があるのか、すぐに逃げ出さなくてはいけないのかを勉強してもらうための、第1ステップとしての意味があるのです。少し分かりにくかったかもしれませんが、災害に関する大事な情報に対してハングリーな状態にならないと、住民は絶対にご覧になりません。そのための一つの材料として、クロスロードのような方式を使うことはできると思いますし、私もそういう使い方をよくします。

結論の二つ目にうつりましょう。先ほど、クロスロードには正解がないと申し上げました。このような問題はまさに正解がなく、「イエス」にしても「ノー」にしても大変つらいのです。では、こういうことを考えたことに意味はないかという、そんなことはありません。防災や減災の問題は、とかく、どうやって自分の命を守るのかという実務的な話になりがちです。そのためのいろいろなテクニックとして、AEDを勉強するとか、心肺蘇生法を身に付ける、消火器がどこにあるかをチェックしておく等、こういうことに終始しがちです。もちろん大事なことではありますが、他にも大切なことはあります。防災や減災は人の命に関わる分野です。特に子どもたちには、そのためのスキルや技術だけでなく、命そのものについて考えを深めてほしいのです。たとえば、先の設問を通じて、自分の命について考えることは、おじいさんの命について考えることでもあり、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんなど、自分の命を自分以上に考えてくれている人たちについて考えることでもある。このようなことをもう少し広がりを持って学んでもらえるように防災学習はプログラム

すべきだと思っています。クロスロードをやったからといって、こういうときはこの棒を引っ張れば良いといった種類の知識や技術が増えるわけではないですが、私はこういうことを学ぶことも重要ではないかと思って活動をしています。

5. まとめ

まとめます。まず、クロスロードが作られた経緯について補足しておきましょう。先ほども言いましたが、もともとは柿本さんが窓口をしていた、インタビューのプロジェクトです。もともとゲームを作ろうと思っていたわけではありません。インタビューのプロジェクトだけありました。

いろいろな場面で災害対応に当たった150人ぐらいの神戸市職員の方々の話を伺うインタビュープロジェクトです。特に私の印象に残ったのは、トイレの確保や保守をされたり、ご遺体の安置所で働いた方の話です。他にもライフラインの回復や、避難所の運営や食料の調達に当たられた方など、いろいろな方々がいました。

これは、お手元のレジメにもアンダーラインを引く形で載せているフレーズですが、ある神戸市職員の方が言ったことです。あんな事態が起こってしまうと、マニュアルの大前提が崩壊しています。マニュアルにないことがたくさん起こります。そういう場面ではあらかじめ決まった正解、つまりマニュアルに従うのではなく、「その時その場でみんなで正解を作っていた」と仰っていました。私は今でも、この言葉、「その時その場でみんなで正解を作った」という言葉が、印象に残っています。だから、「その時その場でみんなで正解を作る」練習を事前にできれば、生まれて初めて「その時その場でみんなで正解を作る」場面に立たされるよりも、少しはましなのではないかと考えました。そんな思いから、「その時その場でみんなで正解を作る」練習をするための教材として、このクロスロードを作成しました。

最初にクロスロードという言葉には、分かれ道から転じて重大な決断や人生の岐路という意味があると申し上げました。英和辞典を引くと、この言葉にはもう一つ意味があります。当たり前のことですが、道が分かれていく所は、反対側から見ると道が出会う所でもあります。つまり、交差点という意味もあります。そこから転じてクロスロードという言葉には「多くの人が集まって共に

活動する場」という意味もあることを、実は後から知りました。

特に今日は、違った市町村の方が一つのテーブルを囲む形にグルーピングしています。いろいろな立場で、バックグラウンドを必ずしも共有していない方々が会って意見を戦わせたり、自分たちなりに得られる合意をつくっていく練習をする場がクロスロードです。ですから、このクロスロードの2番目の意味も、このゲームの特徴を言い表していると後から思った次第です。

東日本大震災の経験を踏まえて、私たちは二つ課題を抱えたという話をしました。十分述べることができなかつた第1の課題について、少し補わせてください。それは、クロスロードをすでに経験されていた方々にとって、東日本大震災の被災地は、どのような場だったのか、端的に言って役立てていただけなのかという課題です。もちろん、何の役にも立たなかつたと感じている方もいると思います。でもそういう方々は、普通はわざわざ「何の役にも立たなかつた」とは言ってこられないので、私たちの耳に入りません。ですから、私たちは、自分たちに都合のいい言葉だけを聞いている可能性が高いと思います。

でもその前提で、少なくともこういう方もいらっしゃったというエピソードをご紹介します。この方は先ほど紹介した「1,000人のクロスロード」という昨年行ったイベントでも、神戸にお越しくださり、このことをお話しくださいました。

この方は宮城県の職員です。当時ガソリンが不足していたので、特別な車面にだけ給油できるチケットを発行していました。普通なら上司にお伺いを立てて、いろいろなことを考えて発行しなければいけないチケットを、自分の独断で発行することにしたといひます。

マニュアルにないこと、あるいは本来なら上司にお伺いを立ててやらなければならないことだけれど、「クロスロードで、何かの決断をして行動を起こさなくてはいけない場面があることを体験していたことは、何らかの心構えと割り切りの良さを私に与えてくれていたような気がします」と最後に書いてくださっています。

もちろん、「あなたは県職員として、マニュアルにはないけれどガソリンの優先給油券を発行しますか、しませんか」という設問をこの方が事前にプレイしていたわけではありません。それ以前からあったクロスロードにはそんな問題は全然含まれていませんでした。そういう意味では、設問の中身が直接役に

立ったという意味のフィードバックを頂いたわけではありません。しかし、たとえそうであったとしても、今日この後体験していただくように、この方の言う「割り切り」というのでしょうか、被災地で自ら主体的に決断をしていく心構えを持っていただくという点では、クロスロードの経験を役立てていただけたのではないかと感じています。

最後にチラシの紹介をして終わりたいと思います。

チラシが2枚あります。「1,000人のクロスロード」は、こういう権威付けをする商品やサービスが一番怪しいといえれば怪しいのですが、その日の「News Watch 9」というNHKの番組にも取り上げていただきました。

それから、もう一つチラシをお配りしました。今日ここに持参した拙著「被災地デイズ」のチラシです。今日ファシリテーターをする柿本さんにも2章分ぐらい書いてもらいました。私が書いた本の中では一番読みやすいと思いますので、もしよろしければ手に取っていただきたいと思います。中身は、今日紹介しているクロスロード形式の設問を、被災直後からかなり時間が経つまで、時系列に31問並べた形式になっています。かなり時間がたってからの設問としては、災害遺構として破壊された庁舎、町役場を残すか残さないかといった設問です。31問のクロスロード形式の設問を通して、被災地の日々を追体験いただけるような書物です。被災地の日々という意味を「デイズ」という言葉に込めました。私自身も半分ぐらい書いていますし、行政、消防やマスメディア、研究者など、それぞれの設問にコメントを頂くにふさわしい方々に書いていただいています。もしよろしければチラシをご覧ください、書店等で手に取っていただければ幸いです。